琵琶歌

上之卷

國送櫻城小常陸
船別狩山督九
錦之御旗

金剛石
武藏野
捕正行
台湾入
石童丸
吉野落
上下

音明
譜確

223
693

特65
811

精神を涵養せしむるの譜楽は薩摩琵琶に如くものなし
其曲調たる音律の妙又他の楽器の及ぶべからず
非ず寧ろ一撥弾揮して悄然猛将を
泣かしめ弾じて激越なれば情然丈夫を起たしむ
しむ今や我国男子宜しく剣を磨
し鋭気を養ふの秋に当り是を弾きて慷慨の
気を求めん是を放語して悲壮の情を起さしめんか
け又以て軍国青年の士気を鼓舞するの一助た
らんか偶々知人宮田氏是等の粋を集めて小冊
に綴り師より受けたる妙節を譜号に記し廣く
江湖に分つと乃ち卿の所感を述べて序言に替ふ

征露之歳

佐々木彌吉郎

38.6.21
内交

目序

夫れ薩摩琵琶の勇壮悲哀なる世すでに定評あり而して之樂器の隆盛を来すと共に亦た当世の世に現はれし実に拍数以上の そゝらる然れども中に果隠之歌数載せたるあり或は字句の誤りあり加ふるに其曲譜に等しては只単に干、崩、吟猪等数亦すのみにて未だ完全に其抑揚数記載せるもの非らず余尚黄嘴の身にて好くその蘊奥数究めんと思ひ聊か此の点に留意するところあり特に私習者の便数計り師より学びたる宜節数譜号に記し爾に上梓すと爾云

編者識

譜歸

聲の終りなやゝ下げる

聲の終りなやゝ上げる

聲の終りなを長く引き震はせつゝ上げる

聲の終りなを長く引き震はせつゝ下げる

聲の終りなを長く引き震はせつ聲なを拔く

×× 地聲の変化

聲の終りなを長く引き且つ上げ切る

聲なを長く引き終りなを下げる

吟替、崩の中

は天

は地

彈琴者心得

一彈琴中は歌中の心得故以て琴すべき事

一節は凡て自然なる貴ぶ事

一彈琴中は体裁眞直なすべき事

金剛石

金剛石は、
玉々光はなすべし、
人も学びてかくあらんこそ、
誠の徳は顕はるべ、
時計の針は絶間なく、
廻るの如き時の間なり、
日影惜しみて励みなば、
いとなる業の成らずべし、

一

水は器に從ひて、
其樣々に変りぬる如く、
人も交る友により、
善に悪きに移るなり、
たのきに優るよき友を、
擇び求めて諸共に、
心を駒に鞭ちて、
學の道に進んでし

國船

雲に從ひる高山も、
登りはふとの城えすて、
空を浸せる海原も、
渡りは終に渡る」以
大平の秋津洲は蓋すす、
東の海北離き島、
例」は海の呂中に
浮」る、私にすも以たり」

二千方里の私の中、
四五余家の乗組あり、
私の主は指揮を受け、
大平洋の海にすゝみ行、
水主楫取多くあるに、
我業も楫取の一人なり、
私のゐる手は稲田の原、
八重の汐路は遠けれは、
隠逸差く折もあり、

高浪荒く時もあり、
私手ゝ業に習はすは、
隠高浪凌き得て、
思ふ港にいつゝ着くべき

送別

蕃さす、
我日ゝ本に人といふ、
人の中より撰まれて、

海原遠く浦々の、
浪の花咲く異國に、
波りわなる君の名と、
誉は世々に跡とゞめ
大和に和出ぬ祝はむと、
心をこめて足引き、
山にも狩り得海につり、
川にすなどり野にたゞよ、
猶あきたらで鳳凰に乗き、

麟を屠りて盃を、
すゝるうちにのたまより、
吟するあのたのしさ、

渭城長雨濕輕塵
客舍青々柳色新
勸君更盡一杯酒
西出陽関無故人

古き調べの唐うたに、
思ひをよせて別さをは、

惜しむ心なつかしく、
皆うち〳〵に又酒など、
すゝめて興をそ添へにける、
暫くありて一同に、
杯さゝげ起ちて、
君が歳と唱へけり、
君が歳と唱へけり」

補正行

正安四年正月は、
井殿の皇居に参内し、
四條隆資卿が経て、
心の中をそ奏しける、
先臣正成勤王の
軍を起し能く敬
神滅はして先帝の
叡慮を安め奉らせし」
其後天下また乱れ

逆臣尊氏筑紫より、
都を立て攻上る、
正成覚悟を定めけむ、
終に津の国兵庫なる、
湊川にて潔く、
中ノ下 戰死をこそは遂げたりき、
その時正成斬くに、
十一才に成りぬるを、
軍の場には伴ふなと、

中ノ下 河内にくだりつゝしつゝ、
敵を亡し我君の、
世代に忘せじと細々に、
遺し訓の言の葉は、
きり ふかく耳にとゞまれり、
然るに正成今は早、
年も廿才に成りぬれば、
今に及びて敵敵を、
打亡さで過しては、

いつぱの待ち人の方は、
思ふにまかせぬ習ひにて、
病うためにて死しもせば、
君の為には不忠なり、
父の為にはふ幸なり、
されはいざ帰立と、
手痛き軍仕り、
彼の首を取り、
手にかけるの取り、

首なく彼にとらるるの、
二つの中に戦ひ、
雄雄なる決し申すこと、
今夜軍取りの、
必死の覚悟に候へは、
今生にては今一度、
龍顔拝し奉り、
御別れは告るなりと、
申しもあへず涙をは、

鎧を袖に注きつゝ、
義心色にあらはれぬ。
帝は簾高くかゝげさせ、
中干　近く召されて宣ふよ、
汝の勇戦に、
敵の勇猛挫きしは、
獻虜を慰するに足るそのし、
父子累代の勲功は、
深く感するやまり、

朕は汝を股肱とす、
必ず命を全ふし、
王家の重きに任せよと、
畏き詔ありければ、
宣旨を地に着けて、
是を最后の參内と、
思ひ定めて退きぬ、
くてぞ服申上、
如意輪寺の壁中に、

三百余騎の名ばかり連れ、
また其奥に鎖して、
「のぶしと呼て思ひ付梓弓
なき数たいの名をとどめる、
と、
一首の歌ばかりおし、
甲冑ばかりて、勇ましく、
四条畷に向ひける、
四條畷にたどりける」

櫻狩

霞棚引山々、
盛りの花を眺むと、
いなく駒に鞍おのせ、
東雲近く麻芋生の、
芝の庵ばかり、
堺はなれし嶋の、
聲ばかりつ、春の暮に、

燃る草葉の露分けて、
すゝむる駒のたてゝみた
乱れそめたる青柳の、
糸は傳ふ鶯の、
吹くもたにゆゑし香は、
たゞりて枝を傳ふて、
思ふはるかに遠近の、
中十 梢は雪の白雲の、
景色妙なる姿の様に、

浮世の善悪も打忘れ、
暫し木陰に立ゝて、
夫婦の業はとゝあ一す、

薄命能申旬日壽
納言姓字冐斯花
零丁惜宿平忠度
吟詠恨凡源義家
志賀浦荒飜暖雪
奈良都古簇香霞

南朝天子今何在
欲望芳山路更賒

と。

生きつづけたる水菫は、
跡にのこりて、その香を、
風のまにまにあくれば、
けやきは盛を早すぎて、
ちりしく花は砂に畑に。
中千
とびこうふ蝶の如くなり。

吟稿
あゝ世の中はうつり行く、
夢のうつつの昨日まで、
栄えしあゝ今は早、
見る影もなく荒はて、
浮世の中と嘆ちつゝ、
今更それと夕暮の、
鐘の音さへ耳にみて、
昔をしのぶ人もあるべし
さはちぶりの木陰。

又来む年にめぐりあい、
まつとき人の何時すぎぬ、
中千時めく時のおとろへゆや、
常住盛衰は世の習い、
たゞ玉鋒の道理なり、
迚らん外はおろかけり、
いざ帰らんと乗る駒の、
手綱ひくる長袖に、
夜の吹雪はつりけり、

武蔵野

武蔵野に、
草は種々多けれども、
摘ケ菜にすれば少し、
皆人は、
若き時ばかりに、
徒事に日を送り、
夜の吹雪はつりけり、

大千
才智藝能ふき人は、
宝の山に入りぬる、
空敷帰るの如くなり、
たまく人間界に生れ来て、
真物の玉を磨くすべは、
中千
人と生れし甲斐もなし、
只人なりは浅く思はれて、
犬の歳老たるぬくにて、
中千
朽ち果つるこそ甚念なれ、

又何時の時にか磨くべき、
頼まれぬ世にあるかの月鼠、
野く草葉の露の命なれども、
別令高位長者の身となりて、
七珍宝満ちて、
栄華に驕る楽みも、
まり
夜の夢なくぬくぬ、
歓楽極まりて哀情多し、
古人の文にも記されし、

それはにや、

生々世々の樂みも、

中千 心の中の月や花、

之は樂む人もなし、

大千 会者定離盛者必滅の世の習ひ、

春ちる秋は蟬の声、

あはれはこの身浮世かな」

世の中を、

思へば夢の稲妻よ、

ちらとする間の語らひに

中千 慳貪愚痴は迷ひなり、

あゝ引寄せて、

結へば草の庵にて

きり 解くれはとの野原なり

少きを、

足りぬるも知る満ぬれは

月も程なく欠けて行く

十六夜の空や、

人の才士とおられたる

城山

支き、

達人は大觀す、

抜山蓋世の勇ある栄枯は、

夢うまぼろしの、

大隅山々將倉に

眞昼の月の影淡く、

せ念を想ひ憾すらむ

何ぞ怒るべき、うり猪の

俄に激するねる騎

勇みに勇むはわり雄の

騎虎の勢に轍に

中干 どすり進きて是非もなし

たに才一つを打捨て

若殿原に報いなむ

崩レ 明治十年の秋の末

三。

諸手の軍打破り、

打つ討たるつやうに散る

霜と紅葉の紅の

血汐に染めとの「てみぬ」

薩摩武雄らをたけいに、

打ちる丸は板屋うつ

霰たはしるかくにて

面をでけん方そふき

木だまに響く鯨波の力

百の雷ひとしきに

「落つる」の如き有様は

大平

隆盛打ちみてほゝえ笑み

あぶ勇ましの人々や

亥年歳以来養ひし

勝の力り試しみて

心に残る事もふし

いさ諸共に塵の世に

のこり出でけ時と

唯一言だに名残にも

桐野村田だけしめとし

宗徒の輩諸共に

煙りと消えし武士は

心のうちこそ勇ましけれ

孤軍奮闘衝圍還

一百里程疊壁間

戎剣既抗吾馬斃

秋風埋骨故郷山

官軍之を望み見て、

昨日（吹聲）迫は陸軍大將と仰れ、

岩の寵遇世の常へ

比ひなこりし英雄も、

ふりはあふく岩崎の、

山下雲と消へにけり

移ゆきは変る世の中に、

世情は深く感しつゝ

今量の思ひ胸に満ち、

たゞ悄然と孫五郎憂へ
目と目を見合す斗りなり
折しもあきや吹き下す
峰山颪の夕嵐
岩間にせせふ谷水の
世情のあくなきたとふく
悲鳴するときこゆるき
鎧を袖を濡し添ふらし

臺湾入

皇之
御稜威は四方に輝きて
情を遂に和議成り
臺湾島を献上し
合戰忽に治まれる君の
はせこそ目出たけれ
臺湾島の土賊を
龍車に向ふ蟷螂を

斧なふると聞へしは、
征討の師をば遣けるに
近衛兵の精鋭を
率ゐては渡海召されしは
陸軍中将大勲位
北白川の宮とも
金枝玉葉の御身なる
三貂角の上陸
幕営もありし其跡に

木を削りてぞ記せらる、
炎熱やくが如き日に、
三貂大嶺の険阻をば
馬にも召さず越え給ひ、
大雨頻りに降る時も、
濡れにぞ濡れて進まる、
士卒之れに感激し、
病兵さへも立上り
命以惜まず進軍すし

所々の砦に籠りたる
賊兵、この射出す彈丸は
雨のあられ、の白雪の
降り注くの如くにて
砲煙暗く天を蔽ひ
百雷均しく墜ちた似たり、
宮は矢石を侵しつゝ、
突貫せと下知あれは
川村女將貝島大佐を初めとし

勇ム起たる近衛兵、
我先きにと奮進し
賊の本営に突て入る、
賊兵之に気を奪れ
右往左往に逃げ散りて
降参するの数おれす
大砲小銃の戰利品
山と築こゝ斗りみて
勝鯨波ドッと揚げれは

宮は時悠々として
基隆城に入らせ給ふ
斯くて六月十日には
基隆城は陥入り
七月新竹を占領し
翌る八月には
彰化台湾の両府を定め
十月初めつかた
台南指して進まる

大午
天暑ふして瘴癘多く
地峻嶮にして糧道絶ゆ
手幸書芳の基中に
宮は士卒と食を領ち
昼は汗馬に鞭ち上
夜は荒野に露宿して
戎衣を袖に月を宿し
只君の為め君の為め
御宮の策を続し給ふ

吟詠

御痛はしや悲しやな、

牛の園生のはずれにて
あまり艱苦が積ませず
遂には病に罹らせ給ふ

日々に重らせ給ふにて
は供の人々うち驚き
都に帰らせ給ふ様

却には諫め申せども
宮はいつこふ少も言はず

我官軍の將として、
賊徒が定が見ぬ中は、
たとひ台湾の土とはなれはとも、
中干
我の身は卒度打ち捨て、
事て都に帰らむと、
籠に召れて進まるゝ、

は臨終の其際に、
賊徒平定と少し言し、
宮はにっこと打ち笑み給ひ、

武歳と云ふ、
叫び給ひし斗りにて、
中干あふく天に昇らせ給ふ、
傳へ聞く、
日本武尊の古事は、
今目の前に見奉らせて、
不中の民も兵士、
慟哭せざるはなかりけり、
ちなみに、

昨日の日は思ひ出れば、
老少不定に貴賤ふし、
昨人は、
名こそ惜しけれ皆人は、
名を千歳に残せし、
臺北悠々に政成
皇軍到處湧歡聲
旭光将被臺南地
彼戮巨魁安萬生

と

宮の謡い給ひし如く、

成功偉烈後の代に、

輝き渡るそ有難き、

小川の水は逝きて帰らぬと、

月影清く澄み渡り、

光はげに流るむ、

光はげに流るゝ

常陸丸

征露の軍よりに、

進みて来山々、

険阻すでに打破り、

大平の音に少し要害の松嶋港も閉ずれて、

鷲の棲むてふ満洲も、

君の威稜威の前風に、

今は靡こゝ草もふし、

心筑紫の島ばかり、

玄海灘のたゞ中に、
吹き込む風に日の丸は、
旗翻す常陸丸、
佐渡は漸ひて進みゆく、
秋路のはては遠くとも、
何故荒ぶる荒潮ぞ、
逆巻く中の黒煙
見る間に走りすゝむ
戦ひとりまく敵の猛

こは何事といふ間もなく、
乱射乱撃雨あられ、
進み進むひまもなし、
千里は走る猛獣の、
水に入りては泳ぎたせん、
千里はかける大鵬も、
浪には翼折れぬべし、
心は矢よりも早けれど、
運送船の悲しさは、

五。

進退窮に谷まりて、
鉦太鼓も敵船に、
任せ果てそ是非もふし」
佐渡は、こと眺むれは、
霧に一たり分これとも、
同し様ふる運の末、
輸送指揮友須知中佐、
是迄ありとも思ひけむ、
大人保少尉の捧けたる、

聯隊旗は手に受けて、
都の方は伏し拜み、
中尉
火は放ちて焼き捨れは、
各将校もとり〳〵に、
貴重の品々焼き捨てゝ、
中尉
中佐は軍刀抜き放ち
せ念の涙はらゝと
落つるは袖に打掛い

寄蔵唱悠々と、
獲撥き切ってそうせける、
烈ふる将校初めとし、
下士兵卒にいたるまで、
吟音
同じ枕に伏すもあり、
海に投じて死するもあり、
敵弾ます〳〵加はるは、
甲板上はたちまちに、
屍の山をきつきつ、

流るる血汐に玄海の
浪は朱にそ染みにける、
京も敢果ぶや常陸丸
君、寄蔵の名を細く、
我忠勇の将士等の、
世限の恨み打棄せて、
潮の泡と消えにけり、
四辺千まり七と世の、
水世月十五の暮つかた、

夕日は浪に落ちされと、
霧立ち霞ふ海原は、
中千あやめの分こぬ斗りなり、

けに忠烈の武士の、
中千十年の宿鉄夕に、
磨きたゝし日本刀、
武さむ敵の前に見て、
遺恨の刃ト太刀も、
狙ひたるかはくはなり、

駒の蹄に満洲が、
踏みにしらむ夢ふれや、
ウラル、バイカル打越えむ、
あゝまことの幻の、
思ひは世念の極みなり、
吁聯隊の我勇士、
水積屍と消えしこと、
ゆに徇せし大丈夫の、
古きその名は書けも、

響の洋にたつ浪う、
絶ゆる時ぶく卿しうそむ、
きり
末遠く流るらん。

小督

頃し、
秋の半の空、
泣めこちふるさ袖く、
きり
涙の露は拭はせ給ひ

大千宿立に侍ふ操ぶ大御中國は召れ、
如何に中國、
小督の方は知りたるか、
内裏を逃せ出さしどり、
嵯峨の邊りに聊いて、
知己便りて生りと少く、
汝ぬにして尋ねいで、
は文傳ふるの卿ぶり、
中國つく〳〵思ふ様、

嵯峨の邊りと計りにて、
主人の名はたに知らされは、
尋ねて様はきけとも、
小督殿は、
世に知らせたる、
琴の上手にをすれは、
今宵最中の月影に、
琴は上手しいでて、
一曲弾たに、

調へ合はぬ事もあらし、
兎角に尋ね出てすいらせて、
獻慮は安き奉らせと、
心に思ひ定めつ、
思りぬと少しきけ、
直くにけ前はまこりを、
寮さは馬に打乗りて、
大千〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
隈ふき月に鞭は揚け、
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
唯亦鳥くけ山里と泳しけて、

六。

峰峨神の奥に分け入きは

閃き波る白露に

尾花の袖も打濡り」

鳴きかはしたる虫の音も

浮き世の善悪も思はれて、

いとゞ心が痛むつゝ、

宗ある毎に立寄りて

中十 「河」とおる者更に示し

如何はせむと駒はたて、

只茫然としてありつゝた、

中十 若し宝林寺にや生すると、

亀山近く到りしに、

大十 賦垣遠に聞こえたり、

峯の嶺の松風の、

奉ぬる君の琴の音の、

とゞつ行けば村の

松の影ふる門戸、

内にゆふるつま音哉、

六一

手綱ゆるめてつくづくと、
少けは誠や月花の、
御遊の座に侍りて、
笛の役仕ふまつりしとき、
き、覚えつる調にて、
中
深更曲は想夫恋、
さては徐きもあくしとて、
腰より用笛ぬきいで、
少し計り吹き ふらし、

やうて駒よりとく降りて、
門ばたとくと叩き、
われは中園内裏より、
使に参りたり、
開けさせ給へと訪ふに、
琴弾居し、
静まりゐつりて音もふし、
やゝありて、
いたづけしたる小女房、

門は細目にあけおき、
顔はうすいたし、
あやしの賤の伏屋に、
内裏より、
使おと給はる（きに）あるす、
門違ひにやをすらむと云ふに、
中宮は、
ふましいに應（し）ては、
中宮門されむと思ひけり、

是非ふく押しあけ内に入り、
妻戸を縁にすゝみ寄り、
何迚こゝろおにはぬ波り候そ、
君には、
中宮
明暮を思し沈ませ給ひ、
つゝ（供御も聞しろさす、
うとけ宴をおらせ給はす、
御命さ、
ほと（は賞東ふふそ見（給）り、

斯く申さば、

うはの空にやはせすらむと、

御玉章拝見すれば、

吟替

あら忘れつるの宮井やと、

はは久顔にあて給ひ、

暫し言葉も涙の雨にぞ

暮れたる月も曇るらむ、

中國殿、

哭くろにせきくる涙袖押へ

とのゝ尉心ぬ参らせつゝ

表の衣袋る計りに成りにける

やゝありて、

はこのりす引結ひ、

女房の装束一と重、

給はりけれは肩にかけ、

君にもさきそ待ちわひてはせすらむ、

重ねては迎ひに参るべし、

待たせ給へと云ひすてゝ、

駒を早めて立ち帰り、

ありし方々は跡ありぶく。

愛する程にぼの〳〵と、

秋の長夜の明けにけり、

秋の夜も明けみけるを

錦くさ旗

天照す、

日々影うつる、

眞名井の流れ末古く、

瑞穂の國は昔より、

武勇忠義の人多し、

元弘年中の事なりよ、

後醍醐帝の三宮皇子、

大塔の宮と申しは、

智勇備はれる君にて、

出家の身にてすませと、

父の為國の為め、

逆賊を討ふけんの企、
早くも賊に洩れしことは、
比叡々奥にも南都にも、
身を立き給ふ事このたく、
熊野に成すして在給ふ、
股肱々臣は誰々ぞ、
赤松律師光林房、
木寺の相模三河房、
片岡八郎武蔵坊

平賀の三郎矢田彦七、
村上義光の九人にて、
柿の衣に笈を負ひ、
頭巾眉深に被りて、
先達つくりて山伏の、
熊野詣に出立ちたり、
龍樓鳳闕に人とぶり、
輕軒香車に出ますも、
雲上人の徒歩行は、

長途いたとは洪の、
人々あやうく思ひ〜に、
社々のは祈り、
宿り〜の御勤め、
露も怠り給はは、
動時はつめる山伏、
中千
見咎むる者更にふし、
由良の湊は見渡せは、
×××××××
沖漕く船の猶なた〜、

浦の濱木綿幾重とも、
知らぬ浪路に鳴く千鳥、
紀路の遠山渺々と、
薄霧の藤代の、
中千
松にしぐる磯の浪、
和歌吹上の浦こゆて、
吟替
月に磨ける玉津島、
○○○○○○
光はよそに伏拝み、
○○○○○○
長汀曲浦の旅の路、

心は砕く習ひ乍ら、
雨は含める孤村の樹、
夕を送る遠寺の鐘、
哀は催す黄昏に、

切目の王子に着給ひ、
叢祠に袖は片敷きて、
朝家の栄を祈りまする
斯て十津川戸野兵衛、
牛原たより居給へと、

爰にも長くありうねて、
高野の方へと落ち給ふ、
茲に妹知瀬庄司と、
賊に一味の士、
宮はさして申す様
此道通れば申すは、
鎌倉よりの罪せらるる
とは云へ、
宮に弓引くは、

いたく畏き多けれは、
錦の内侍賜るこの、
左なくは一人の内侍なり、
中下 止めて證據に出んといふ、
股肱の臣なる一人たに、
いそ給ふこき、
詮方ふる内侍をは、
彼に與へて虎口、
中下 僅に遁れ給ひけり、

斯るやさに、
村上彦四郎義光は、
草鞋の緒や切れたけん、
遥に後れたりしは、
宮に追付申さむと、
山崩し足疾く過くる折しもあれ、
庄司にハタトハ逢ひ、
下人の持てる横見れは、
ぶーく錦の内侍なり、

不思議に思ひ尋ぬれは、
事云々と答ふるに」、
頼光少きもあへす、
クワッと怒りて打ち睨み、
汝はそも如何に何事ぞ。
恐くも畏くも四海の主人に御坐します」、
天子の御子、
朝敵を追罰あらむ其為に
御門出ある道にして」、

汝等如き下郎輩、
かゝる振舞すべきものと
持たる鉾を奪ひとり」、
大の男を搔攫み、
四五丈計り投けたるは、
獅子の荒れしに異ならす」、
其怪力に恐けむ」、
太平
妹加瀬庄司一言半句もなくてすくみけり、
頼光は鉾を肩にしけり、

程ふく宮に追付きて。
御前にひれ伏し。
事の由具に申上げ奉れば、
宮は御喜び、
吉の北宮勦の勇氣にも、
たち增されりと愛でまし給
そそのみふらす義光は、
吉野の奥の戰ひに、
宮に代りて討死し、
御後にうちたる月と日の、
光乎ふ忠臣と、
義士とたゝへて後ゝ世代、
君に仕ふる人臣の、
鏡とぞは仰がるれ、
鏡とぞは仰がるれ。

石童丸

筑紫ゝ大守名も高き、

加藤左エ門重氏は、
世情に感じ世をすてゝ、
諸国行業にて給ふ、
残されたる妻や子は
思ひ待つ事十余年、
父上高野に登りとや、
石童丸は母上と、
菅の小笠を頂けて、
旅の労しいとゞなく、

漸く高野の麓宿、
明日逢はんと喜ぶと、
女人禁制の山なれば、
母を麓に留め置き、
是非なく石童丸ぞ犯り、
杖をたよりにたどゝと、
心細道踏み分けて、
峯の薬師や瀧不動、
手を合せつゝ伏拝み、

その夜は甚くやむに暇寝して、
笠の屏風に脱枕、
諸り共常と共涙る、
鐘の音さへ冴にしみて、
九百九十の寺々や、
峯谷々の阿弥陀佛、
菩薩地獄も尋ぬれと、
父そと思ふ人もなく、
この夜は早過ぬ、

鞠の母を案すれは、
後ろに引こそ心地して、
松吹く風の音までも、
母の物こそたうけれ、
はろ〳〵と泣く山鳥の物まけは
父ととそ行ふ母ととそ思ふ、
と、
行基菩薩の読まれたる、
歌を心に思はれて、

歩おそく歩みつゝ、
「今名の橋」にさしかゝる、
左に忠盛右に珠数、
高明真言唱つゝ、
中千
「苅萱道心下り坂」
見上げ見下す顔と顔、
石童丸の振袖と、
高禅の袖とかつぎ合ふ、
其時石童袖にとりすがり、

あゝ御僧とけ山は、
今道心成敗してたゞとゝふ様の、
見まはこゝの幼児の、
腰にさしたる脇差と、
中千
見覚のある顔に、
「さては不思議と思へども、
さあらぬ体にて示して、
石童丸に申する様、
「尋ぬる人の名は誰ぞ、

札場に建つれば逢ふ事も、
あらでと思ひて泣き沈む、
石童丸を苅萱は、
憐み給ひ手をとりて、
己が住家に連れこの上、
大千国は何ぞ名は何と問はせ給へば涙くみ、
國は筑前松浦の、
加藤左衛門重氏の、
忘れ形見の石童と、

聞び苅萱胸迫り、
せきくる涙とめあへず、
石童それと悟りしの、
若し父上にてはさすや、
あらでと前に寄り、
後に廻り苅萱を、
顔のそき込み懇ろに、
もはや時の石童丸、
あら懐かしの我子よと、

言けんとせしの名のこゝろ、
其荊萱は去年の秋、
空敷ふりぬとのたまへは、
石童又ル泣きしつみ、
せめて墓情はあはれ、と、
祈れて荊萱是非もなく、
墓情に連れき指さして、
是きこそ父の墓ぞと、
教へたまへは石童は、

かなくしびざまつき、
涙にぬれし袖たもと、
しぼりもあへす香炉焚き、
雪より白き手を合せ、
南無阿弥陀佛と伏拜む、
姿を見つる荊萱は、
胸も張り裂く計りなり、
十年にあまる時業にて、
生者必滅会者定離、

本来空の道理なり、
悟り出づるも恩愛なり、
情にはもろきものなり」
墓場に倒れし石童は、
抱き起して行くべきに、
涙は佛の法衣ぬらす、
こゝ下りて母上に、
はゝ由云ふて回向せと、
諭されれば石童は

泣く〳〵山坂下りつゝ、
母に告げむと来て見れば、
京ふる郷母上は、
石童丸を待ち兼て、
禁の神辺に枯れ伏る、
草葉の露と消え給ふ、
吟唱
あゝ父上に生き別れ、
又母上に死に別れ、
天に地に便り無く

あとに便りは姉こへ
逢ふてけ由語らむと
帰りて見きは姉もまた
世はすてゝ影ばかし
抱てつきふき浮世こそ
更けわく夜半に霜さて
磯山松は音に泣く
ま鳥しげふく松浦潟
浪に漂ふ捨小舟

ひく人もふき石童は
高砂にありし其時に
憐み給ひし御僧より
外にたゞりはふしとなり
再び高砂に茅萱の
庵尋ねてば弟子にと
誘はれて茅萱是非もふく
打連きたちて忍々世
吟業ふしつゝ信濃なる

ふに住ませ給ひ、
師弟と名乗る計りにて、
親子地蔵と唱へしと、
遺言したまふ宮ぎ寺より、
信濃に名高き善光寺、
石童寺の本尊に、
親子地蔵の立ますなり、
親子の縁はいつ迄、
切つても切れぬ者なるぞ、

今は昔の物語り、
南無や大悲の地蔵尊、
南無や大悲の地蔵尊

吉野山

上段

みよしの、
忍ぶ能因比丘尼も、
夜半に嵐に誘はれて、
仇にちるく時は又、

（六字）愛に二階堂出羽の入道道蘊は
元弘三年正月に
ら奇傑騎ば従して、
大塔の宮の日次ら、
龍ら世俗ふ大和ら、
吉野の城にそ攻め寄する、
菜摘川の辺てら、
吉野ら方ば見上れば、

自枝赤枝錦の枝、
深山原に折ら靡き、
（中十字）雲の飛ちとあわしまれ、
靡には故の大勢すきまなく、
甲の星ばこぐやらし、
鎧の袖を連ねしば、
（中十字）錦を敷くに異らず、
峯高ふして道細く、
山嶮して苔滑なり、

幾千騎の鋭兵、
必死となりて攻むるとも、
たやすく落つべしとも思はず、
うつるまに同く十八日卯の刻より、
崩れ両陣闘ひどとあり、
敵攻め上りは攻め下し、
互に勇気を振ひつ、
ナの谷ナの峯に走せちりて
攻め合ひ闘ひ合ひ、

対手を揃へて散々に射立たれど、
寄せ手の兵は、
命を知らぬ坂東武士、
親討たれても顧ず、
主撃たれても取合はず、
屍をのりこえ、
七日の間息を継ぐ暇なく攻め戦ふ、
血は草葉を染め
屍は路頭に横はる、

斯るに寄せ手の案内者、
岩菊丸は、
▼是軽共に下知し
金峯山の峻坂越へ、
木の根岩角よち上り
▼鯨波作りて攻めければ、
城兵も今は前後の敵なれば、
▼自害する者あれば
猛火の中に走せ入て死する者あり、
同じ敵と引組て差違ふる者もあれば、
大手の堀は忽ちに
死骸にて埋めたり、
宮に注進する者もあり、
宮にこの由申し
赤地の錦の直垂と、
緋威の大鎧に、
龍頭の甲を着させ

三尺五寸の小長刀を小脇に挾み、
崩れ
▼感覚の兵共廿余人が前后左右に引給ひ、
◀辞うる敵に切て入り、
砂子なとなし烟なたて、
東西なうち拂ひ南北追廻し、
▼爰な詳々と戰ひ給へは、
寄手の兵共廿余人に切立てられ、
風に木々葉の散るなかし、
大手四方へ引のけとひきたけける、

宮はえとう春王丸の大夜叉丸に、
悠々と引揚け給ひて、
軍兵と、
最後は酒宴なそ遊はされける、
この戰に宮の召したる鎧は、
七筋の矢に射つけらるゝ、
頬先と二の腕に、
二ヶ処の突き傷負はせ給へと、
立たる其矢抜かせ給はす、

流る血潮も拭はせ給はす。
敷皮の上に立ちあかり。
大杯を乞ひ給ひ。
中干
「頃ケ給」は木寺の相模、
四尺三寸の太刀先に、
敵の首をさし通し、
宮の御前に畏り、
声高らかに歌ふ様、
大干
戈鋋剣戟を降らす事」電光の如く、
○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○
磐石山岩をとはする事雨の如しと邑、
○○○○○○○○○○○○
天帝の身には近付かす。
○○○○
又て修羅
○○○○○○○○○○○○
彼のために破らると、
○○○○○○○○○○○○
太刀振り合し舞たるは、
漢楚の鴻門に楚の項荘と項伯の、
剣をぬいて舞し時、
樊噲庭に立ちふさかり、
幕をかゝけて項王を、

睨みし勢ひ、

斯くやと覚ゆる計りなり、」

仝　下脱

去程に、

村上義四郎義光は、

あまり烈しく戦ひて、

敵に矢十六箇所射付られ、

箙中の節や袖摺の、

「やうやう折ふせて立たるは、

柏木に成る玉蔕の風に、

麻小くこの如くなり、

甚矢数に暇なく、

宮のけ前にひれ伏して、

一ノ木戸は早破れ、

ゑ二ノ木戸にて支ふれと、

連々の戦に、

軍兵共は打死し、

そこの龍城覚東ふし」

敵四方に囲まれぬ。

中ニ 早く敵させ給ふ」し。

昌は恐き多き事なり。

めさせられたる直垂や、

け物の具に頂戴し、

け諱に犯し奉り、

敵に戦死はらさと。

忠義面にあらはれて。

中ハ いと懇に申上れは。

宮は哀に思召し。

いとこの。

さある事のあるまさそ。

死出の門をとすれ。

吉野の山に昔けき。

中ニ 名に残さと宜」は。

有光ゆ」あ」す。

中ニ あ」津有義卿」ふ

昔漢の高祖の、
滎陽に囲まれ時、
紀信高祖の眞似をふり、
楚を欺くとて、
高祖は是を計らひ、
ふれ事のは覚悟あらせられすして、
天下の大事を、
能くたはしたまひ、
早ち物の長下し賜はれと、

ふ鎧の上帯を解きまつりは、
宮人実にとや思しけむ、
ふ鎧の重き、
ぬぎ給ひて羅光に、
手つから渡し宣ふやう、
我もし生きのびたらは、
汝の後世を弔らはむ、
又打死をしたらは、
同じ冥土にゆかむ、

「是ぞ生の別ぞそと、
言葉すくなく宣ひて」
涙なのらに落ちさせ給ふ、
義光殿、
せきくる涙押さへて、
木戸の櫓に走上り、
「大音揚けて名乗る様、
太子
抑も是神武天皇より九十六代の孫、
今の帝に第二の皇子、

欠

MISSING

琵琶歌

明音確譜

巻之上

錦之御旗　常陸　小城　櫻送　國

九督　山狩　別船

吉野　石台　湾童　武正　捕藏　金剛

上下　落丸　入行　野石

223
693

074717-001-7

特65-811

琵琶歌（音譜明確）

宮田　秋堂／編

M38, 39

CEJ-0307